

**INTERVIEW 04**

炬火トーチデザイン  
川内商工高校3年  
福永 沙夏さん



製作に当たっては、まず鹿児島県の良さを考え、浮かんだアイデアを形に組み合わせていった。県花のミヤマキリシマや県鳥ルリカケスをデザインに組み込み、華やかで美しいデザインとした。炬火の持ち手は、三角柱の形になっており、障害のある方にも握りやすい工夫をした。新型コロナウイルスの影響で開催状況が変わってきているが、このトーチを通じて、少しでもみんなの気持ちを明るくできればと思う。

**INTERVIEW 03**

ウエイトリフティング競技  
入来地域応援隊  
花田 博之 代表



昨年の全日本社会人選手権大会で入来が地域全体で盛り上がりただけに残念。次期開催の時に応援隊長を務めているかは分からないが、どういう立場であれ応援していく気持ちには変わりはない。

ホッケー盛り上げ隊  
(市ホッケー協会)  
猶野 隆明 会長



特に少年男女の高校3年生が最後だけだけに残念だが、経験を生かして大学生なり社会人として活躍してほしい。次期開催に向けて、モチベーションを保つのは難しいと思うが、腕を磨いて頂点に持って行ってほしい。

**夢は続いていく  
次期国体へ向けて**

**今** 大会での開催を目標に練習を重ねてきた各選手たち。また、大会会場や受け入れ、運営準備を進めてきた関係者たち。国体開催は来年に延期されましたが、これからの競技にかける選手の熱意や地元開催にかける関係者たちの思いは同じはず。次期国体や全国大会など、その他のステージでも競技への挑戦は続いていきます。

来年以降の鹿児島開催時期を巡っては、鹿児島県知事をはじめ主催者で開催に向けて協議中であり、全国の関係団体との調整が必要ではありますが、県内関係者は、早期開催実現を期待しています。

選手たちの中には、年齢的な条件などから今大会を最後に競技から退く選手もいます。競技者としての挑戦は終わりますが、その選手らが積み上げてきた努力や記録は宝となり残っていきます。競技者から指導者として、それぞれの競技を次の世代へ継承していつてくれることでしょうか。地元開催にかける思い、夢はこれからも続いていきます。

フェンシング



野島 里玖 選手  
(里中学校出身)

新型コロナウイルスの影響で、国体が延期となったことは悔しいが、それ以上に大切なことは一人一人の命。これまでとは違う取り組み方になっていくと思うが、対策をしっかりとし、工夫しながら練習していきたい。高校では、あと一步の所で逃した日本一という目標を大学で勝ち取りたいと思う。

競泳



新開 誠也 選手  
(川内南中学校出身)

初出場であった昨年の茨城国体では100mバタフライで7位。かごしま国体では地元での優勝が目標だったが、延期が決まったときは残念だった。まだまだ日常に戻ってきたわけではないが、練習できる環境に感謝しながら、今回の国体で果たせなかった頂点を目指して、充実した練習に取り組んでいきたい。

馬術



木原 れな 選手  
父：康弘さん  
(乗馬クラブ MasterHorse 所属)

今も現役選手である父の影響を受けて小学2年生から馬術を始めた。2015年に出場した、第39回全日本ジュニア障害馬術大会2015で幸いにも初の日本一を獲得でき、さらに向上心が生まれた。国体延期については、祖父からも出場を期待され本大会に合わせて練習していただけに、残念な気持ちがある。かごしま国体の開催時期は未定だが、出場できれば地元での優勝タイトルを狙っていききたい。直近の目標としては、9月に行われる全日本ジュニア障害馬術大会2020で優勝すること。ジュニアでの参戦は今回が最後となるので、ここでもトップを獲りたい。来年の全日本大会からは、父と同じカテゴリーで参戦することになる。お互い良きライバルとして技術を高め合いながら、日々の練習に励みたい。

選手たちへの

Message

**INTERVIEW 02**

鹿児島県  
空手道連盟  
杉本 尚喜 理事長



国体に関しては、2020年オリンピックイヤーにふさわしい国体となるよう、全国からの参加者に心のこもった最大限のおもてなしを考えていた。県空手道連盟では有力選手発掘のため4カ年計画に沿って選手強化に努めてきた。本大会では天皇杯・皇后杯を取れるところまでできていると自負していただけに、延期はとても残念である。空手道競技の会場として、サンアリーナせんだいは全国的にも恵まれた施設である。そのような会場で競技ができることに選手たちにとっても大きな喜びを感じてはいたはず。

**INTERVIEW 01**

薩摩川内市  
軟式野球連盟  
堂園 喜明 会長



新型コロナウイルスが流行した時点で、ある程度の予測はあった。選手を含めた関係者の移動時における感染リスクを考えると、延期はやむを得ないと考える。県下の軟式野球チームは約400チームほどあるが、本大会を選手は楽しみにしていたはず。国体選手の一流プレーを地元の子どもたちにも見せてあげたかった。残念でならない。本市出身の選手も国体の舞台で活躍している実績がある。これからも多くの選手たちに全国の舞台を経験できる機会を持たせてあげたい。